

シマフクロウの森から共生の大地へ

環境が「農・林・漁」を繋ぐ

早稲田環境塾 塾長 原 剛

現代に蘇るアイヌの神

ロシア極東のアムール川から中国東北部、サハリン、北海道、北方四島にかけて分布するウオミミズク属シマフクロウ。全長 63~69cm。翼を広げると約 180cm という世界最大級のフクロウである。

アイヌ語で「コタン・コロ・カムイ」(森の守り神)と呼ばれて崇められたシマフクロウが、北海道東部の森に追いやられてほぼ半世紀。かつての推定生息数 1,000 羽が、いまでは約 130 羽にすぎない。過度の森林伐採や河川改修が彼らを絶滅の淵へと追いやった。国は 1972 年に天然記念物に指定し、環境省のレッドデータリストの「絶滅危惧 1A」に掲げている。生息数の回復には根本原因の排除が不可欠である。

西別川は、摩周湖からの伏流水を水源に、根室海峡まで全長約 70km の短い河川だが、注ぎ込む小さな川が毛細血管のように張り巡らされている。そこに「新酪農村」の建設が始まったのは 1973 年のこと。1 万 6,000ha の広大な釧根台地に、総事業費 935 億円を投入し、大規模酪農を根付かせる国策事業であった。大規模開発によってシマフクロウは森を追われた。場所によっては河畔林ぎりぎりまで原生林が伐採し尽くされてしまった。

川の両岸に最低でも幅 50m の河畔林を残すことは、いまでは半ば常識になっているが、当時は牧草地開発を急ぐあまり、川岸まで森を切り払ってしまった酪農家も多い。

西別川の源流部に近い「虹別コロカムイの会」、大橋事務局長の養魚場にシマフクロウが現れたのは 17 年前。仲間を呼んで「神様」を見せた。誰もが驚きの目で迎えると同時に、「なぜ養魚場なのか」に思いをめぐらせた。河川改修や砂防ダムの建設でヤマメやオショロコマなどの魚影が消え、兵糧攻めに遭ったシマフクロウにとって、養魚場は最後の生命線だった。既に彼らは「命のゆりかご」も奪われていた。巨木にできた「うろ」を利用してしか巣をつくれない。その営巣木が伐採し尽くされたのである。

摩周湖からオホーツク海へ

「分断された河畔林を植樹でつなげ、緑濃い森を取り戻されなければ」。シマフクロウの気持ちを代弁するかのようになり、有志が心をつなげた。コロカムイの名を冠したのは、もう一度「村の守り神に戻ってほしい」という願いからだ。1994 年、標茶町事業で伐採されるはずの樹木 261 本を植え替えた。重機を使った「森の大移動」である。これが「シマフクロウの森づくり 100 年事業」の第 1 歩となり、住民主導の息の長いプロジェクトが始まった。多い年で 500 人が汗を流し。16 年間で約 53,000 本の苗が植えられた。大半がミズナラ、

ハンノキなどの広葉樹である。養魚場に現れたつがいのために手づくりの巣箱をかけると、すぐに2羽のヒナが生まれた。その後も毎年着実に1~2羽の子を育て、17年間に計29羽が巣立った。全道の生息数が推定130羽といわれる中で、1カ所での巣立ち数としては驚異的な数字である。

次第に流域全体の住民を巻き込んだ取り組みへと発展させていった。おりしも川の水位は低下し、酪農汚水が富栄養化を引き起こしていた。沿岸漁業もふるわなくなっていた。「この鳥が暮らしやすい環境を取り戻すことが地域の再生につながる」。神の鳥の運命が、地域の現実とオーバーラップした。今でこそ「アンブレラ・スピーシーズ」が注目を集めるが、そんな概念すら知らない人々がみずから実践していたのである。しかも補助金頼りの事業ではなく、「三菱UFJ環境財団」や「TaKaRa ハーモニストファンド」「ミドリネットワーク」「北海道森と緑の会」「根室管内さけ・ます増殖事業協会」などから苗木の現物支給を受けたり、寄付金を会員や篤志家から募っての自発的の事業である。海原を回遊し、4年後に故郷の川に戻るという循環を生む。生態系を支えるバイカモの再生のためにも植樹は100年計画から17年を経て、今後83年続けられるという。

また、植樹に情熱を燃やすシンガー・ソングライターのしらい・みちよさんを招き、1995年から10年連続で「西別川流域コンサート」を5地区で開催。2002年からは「摩周水環境フォーラム」を流域3町持ち回りで開き、伏流水のメカニズムや清流の指標、バイカモ繁殖戦略などを学んできた。バイカモの繁茂がサケの稚魚を天敵から守り、その稚魚が川を下り大海原を回遊し、4年後に故郷の川に戻る循環を育む。

環境とは何か

社会的存在としての人間が、全うに生きていくには三つの環境を必要とする。土や水、空気など「自然環境」が清浄であること。地域社会や産業を介して培われる「人間環境」が機能していること。「自然環境」と「人間環境」の係わり方、即ち、風土によって形成されてきた「文化環境」が継続、創造されていること、である。

「三つの環境が人間の外部に存在して、人間の生存と発展を開発する誘発力となるのに対して、人間はこれらの環境からの刺激を受け、外部の環境からの衝撃に対してこれに対処し、適応し、環境への適応の結果として、そこに内面的世界をつくりあげているのである。」(入谷敏男 1969)

「水田」という文字は、これら三つの環境が同時に満たされてあるべき状態を示している。たとえば水土が、そして大気の水質がともにまともであること。灌漑用水路や農道、畦畔が縦横に地域を縫っていること。そして最も重要なことは「田」を生産装置のネットワークとして保つには農業地域社会が全うに機能していること。そこには風土と人間の営みによって培われた地域独自の文化が、住民のアイデンティティ(自己確認)の基層として保たれているはずである。

けいこ 笛 田はことごとく 青みけり (小林一茶)

「農業」は元来、さまざまな生きものが織り成す生態系、「生物の多様性」に人の営みと文化が加わって維持されてきた。即ち「環境」と同義語である。環境を前提とした「文化」を農業は意味していた。

環境農業政策は何をなすべきか

今、私たちの最大の関心事は、食物の安全性を保つことである。基本法農政の半世紀と国際分業による農産物市場自由化の 20 余年来の結果が、食の安全への国民の疑問と関心の高まりを不可避の社会問題たらしめた。

政府の「農林水産環境政策の基本方針」(2003 年)は「大量生産、消費、廃棄という社会から、持続可能な社会への転換を図っていく。都市と農村の共生、自然と人間の共生を通じての国民全体のライフスタイルの転換に寄与する。これが今後の我国の経済社会の発展基盤を形成していくと考える」とまで言い切った。

農業は、本来、自然と対立した形ではなく、順応する形で自然に働き書け、上手に利用し、循環を促進することによって、その恵みを楽しむ生産活動である。生育中の水稲、育林中の森林、河川や海で生息・回遊中の魚類などの生物はそれ自体、水、大気、物質の循環を講成する重要な要素といえる。

農林業の営みと自然の生態系とが接する里地里山、中山間地は野生生物の一大生息地域である。溜池 21 万か所、主な灌漑用水路延べ 45,000km には、多様な生物が生きている。

食糧の安全保障と農村の多面的機能の維持を目的に「食料・農業・農村基本法」が制定されて、11 年になる。農業が生物多様性の破壊者となるか、担い手となり得るかはこの法律の実践即ち、農業の関係価値(多面的な機能)をどう評価し、それを維持、創造するためのコストを社会資源の再配分として農業予算に組み込めるかにかかっている。

この観点から、農林水産省政策研究所かの杉戸克裕、田中淳志研究員の現地調査に基づく報告は、自然環境、一次産業に支えられる人間環境、自然環境と人間環境に培われた文化環境を統合し、農業政策と環境政策を合体した新たな農政展開への望ましい方向と可能性とを示唆している。

(第 4 期早稲田環境塾第 2 講座テキスト「暮らしの現場から生物多様性を考える」より)